

第85回麻布獣医学会 一般演題8

喉頭腫瘍：犬と猫の各1例

海老沢 緑, 伊藤 哲郎, 圓尾 拓也, 斑目 広郎, 渡邊 俊文

麻布大学附属動物病院

【はじめに】

犬, 猫では喉頭の腫瘍は非常に発生頻度が低いとされている。臨床症状は一般的な上部気道疾患と共通であり, 非特異的であるために早期の確定診断は困難である。しかし, わずかな腫瘍の増大が呼吸状態を著しく悪化させるため, 症例の状態によっては確定診断よりも救命を目的とした気道確保を優先させる必要がある。今回, 本学附属動物病院に来院し, 診断と治療を行った喉頭腫瘍の猫と犬, 各1例についてその概要を報告する。

【症例 1】

17歳齢の雑種猫, 避妊雌で体重は2.5 kgであった。1ヵ月間持続する努力性呼吸, 嚥下困難, 体重減少が見られた。病変は表面に潰瘍, 出血を伴う直径1 cm大の不整形腫瘍であり, 喉頭蓋に固着して喉頭内腔を占拠していた。生検鉗子で採取した材料による組織診断では起源不明の上皮性悪性腫瘍であった。本症例は永久気管瘻造瘻後に腫瘍に外部放射線照射を実施した。治療後に腫瘍は縮小し, 呼吸と嚥下は改善され, 気管瘻からの分泌物も減少した。約3ヵ月間は良好に維持されたが, その後は喉頭腫瘍が再増大して第135病日に死亡した。尚, 剖検は実施されていない。

【症例 2】

9歳齢のゴールデンレトリバー, 未去勢雄で体

重は27.5 kgであった。4ヵ月前から頻回の吐出と体重減少がみられ, 本学初診の1週間前から呼吸困難が認められた。喉頭蓋の右側から表面平滑な直径3 cm大の有茎状, 球形腫瘍が発生し, 喉頭内腔を占拠していた。症状緩和を目的として腫瘍有茎部での結紮離断による減容積術を実施し, 組織診断は末梢神経鞘腫瘍であった。切除断端の残存病変に対して外部放射線照射を実施した。麻酔覚醒時から呼吸喘鳴音および嚥下困難は解消し, 1週間後には体重の増加が認められた。処置後1ヶ月経過した現在においても経過は良好である。

【考察】

両症例とも重度の上部気道閉塞性呼吸障害を示し, 迅速な気道確保による呼吸状態の改善が必要であった。切迫した状況において臨床症状と経過および上部気道領域のX線ラテラル像から病変の局在を特定できたことが治療方針決定に有用な情報となった。喉頭では腫瘍様病変として乳頭腫と慢性炎症性病変が記載されており, 腫瘍発生の頻度は非常に低いとされている。今回の気道閉塞を伴う喉頭腫瘍2症例での経験から, 症例の生存を目的とした気道確保治療後には積極的な病理組織検査を実施して情報を集積し, 腫瘍の挙動および適切な治療法についてさらに検討していく必要があると考えられた。